

クロアワビ稚貝の放流追跡調査(昭和49年度)

小島 博・中久喜昭・谷本尚則

前年度に引き続きクロアワビ小型種苗の放流追跡調査を行った。本年度は由岐町阿部、日和佐町友垣および牟岐町ながばえの下の各地先に造成されている幼稚仔保護場へクロアワビ稚貝を放流した。牟岐地先については別報1)とした。

1. 調査経過

阿部地先では、幼稚仔保護場(以下単に保護場とする)A、Cおよび実験用保護場D(小島ほか

1979)²⁾へ、18,000個の稚貝を5月27日に放流した。これらの貝の平均殻長は12.6mm（殻長範囲5.4～30.9mm）であった。

日和佐町友垣地先へは、8月6日に4,300個体を放流した。これらの貝の平均殻長は10.7mm（殻長範囲7.1～14.1mm）であった。

また、阿部地先において6月7日に前年放流群（昭和48年6月26日放流）の放流1年後の調査を行った。

2. 調査結果

1) 放流初期の分散移動

保護場へ放流された稚貝は、六脚ブロック、転石、割石の表面から、投入後まもなく、ブロックの溝、転石、割石の間隙部へ移動した（図1）。放流経過日数とともに、稚貝はより下側の間隙や石の下面へ移動した。放流後6～7日目には保護場から主に沖側外部へ分散移動する稚貝も観察されたが、その数は少なく、移動距離は0.5～1.0mであった。

○ 保護場付近の動物相

日和佐町友垣地先の保護場付近で、7月10～11日に磯建網を投入し、動物相を調べた。さらに、稚貝放流の翌日（8月7日）から5日間、保護場の周囲に磯建網を張り、稚貝の保護に努めた。羅網した動物の種類および個体数は表1に示すとおりであった。魚類については胃内容を調査したが、放流稚貝は出現しなかった。

2) 前年度放流群の追跡調査

阿部地先で前年度（昭和48年6月26日放流）放流群について放流1年後の調査により8個体の放流貝を再捕した。調査の際、天然産クロアワビ197個体を採集した。放流貝および天然貝の個体数、平均殻長および殻長範囲は表2に示すとおりであった。放流貝の放流時殻長範囲は10～28mmであったが、再捕貝の放流時殻長は13.0～21.7mmであった。放流貝の平均殻長および殻

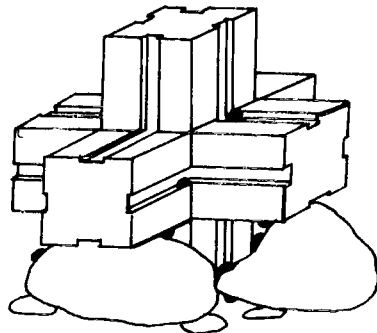


図1. 放流直後のクロアワビ稚貝の付着場所

表1. 磯建網による採集動物（日和佐町）

調査月日	7月10～11日	8月7～12日
サザエ	1	
バテイラ	8	9
イボニシ	2	9
その他巻貝類	1	5
インガニ		1
ベニツケガニ	1	1
オウギガニ科		1
クモガニ科		1
ヤドカリ類	3	5
ムラサキウニ	5	
ゴンズイ	3	1
タカノハダイ	3	1
チョウチョウウオ	2	
ササノハベラ	2	1
アイゴ	1	
ニザダイ	1	5
クジメ		
アカメフグ	1	
ハコフグ		2

表 2. 放流水域におけるクロアワビの年令と殻長の関係

年令	測定数	平均殻長 (mm)	殻長範囲 (mm)
1	37	60.4	36.1～78.6
1※	8	57.3	48.6～69.0
2	117	93.0	73.0～111.8
3	42	103.5	79.3～119.0
4	1	114.6	

※ 放流貝 放流時殻長範囲 13.0～21.7 mm

への移動の状態をさらに長期にわたり観察することが必要である。

放流から1年間の放流貝の生長は天然産の貝に類似することが確認された。今後の追跡調査により、放流貝の生長、漁獲サイズに達するのに要する年数などを明らかにすることは、これからの課題である。

文 献

- 1) 小島 博・中久喜昭・谷本尚則, 1980 ; 牟岐町地先における放流クロアワビ稚貝の追跡調査結果, 徳島県水試事業報告, 151～156。
- 2) 小島 博・中久喜昭・谷本尚則, 1979 ; アワビ稚貝放流水域の生物相, 徳島県水試事業報告, 252～258。

長範囲は、天然産1才貝とほぼ類似した大きさを示している。

3. 考 察

クロアワビ稚貝の保護場内には多くのアワビのすみ場となる空間が形成されており、放流直後からそれらの空間を利用することが観察された。また、放流から6～7日目には、保護場から沖側外部へ移動する貝も少数観察された。放流貝の保護場の利用状況、周辺水域